

国際東洋学者会議に出席して

桜 部 建

歴史の古い国際東洋学者会議であるが、今夏のアメリカ、ミシガン大学における第二十七回会議の第一の特徴は、ともかく「盛大」であった、ということであろう。五十ヶ国からの出席者二千五百人の会合といえ、どの分野の学会にしてもめつたにないことと思われる。ことに日本から学会出席のため百五十人近くも海を渡ったことはまったく未曾有のことである。盛大をもたらした最大の理由は、多分、チャーター機の手配などまでしたアメリカ側の非常なホスピタリティにあった。そんなサーヴィスに乗じて、日本人が大挙して渡米し出席した、とも言えるであろう。

そのようなぎやかな学会であったから、一面で、お祭り騒ぎだとか、特に日本人の場合については「修学旅行」だとか、いわれた点が無かったとは言えまい。しかし、本来個人ブレイというこのあり得ない学問にとって、学者の（特に今回のように多くの若い世代の学者の）国際的な接触交流が直接間接に非常な大きな効果を生むことはいままでもない。ことにとかく

海外からの情報を逸し勝ちな、それだけに孤立的閉鎖的になり勝ちな、日本の学界にとって、やはりこの機会は種々稔りの多いものであったと思う。すくなくとも私としては、アナーバーの一週間は、そこで新たに得たイギリスの若い友人が言ったように、'personally enjoyable and academically rewarding' なのであった。

今回の会議の第二の特徴は、その重点が東アジア研究に構成されていたことである。それは第二十六回のデリー会議を構成した十部会と今度の場合の十部会とを比べて見れば瞭然である。

- | | | | |
|----|-------------|----|--------------|
| 1 | エジプト学 | 1 | 古代近東 |
| 2 | セム族(語)研究 | 2 | 近東とイスラム世界 |
| 3 | ヒッタイト・コーカサス | 3 | 上代南アジア |
| 4 | 研究 | 4 | 現代南アジア |
| 5 | イラン研究 | 5 | 東南アジア |
| 6 | インド学 | 6 | 上代シナ |
| 7 | 東南アジア研究 | 7 | 現代シナ |
| 8 | 東アジア研究 | 8 | 日本 |
| 9 | イスラム研究 | 9 | 朝鮮 |
| 10 | アフリカ研究 | 10 | 中央アジアとアルタイ研究 |

このような構成は、一つには現代アメリカにおける東洋学研究の大勢を示すのであろうし、もう一つには会場になったミシガン大学に極東言語・文学科 (The Dept. of Far Eastern Lan-

gnages and Literatures) がある外に「日本研究センター」「シナ研究センター」などが設置されていて東アジア研究が非常に活潑であるという事情にもよるのであろう(もともと同大学にはその他に近東言語・文学科、南および東南アジア研究センター、近東・北アフリカ研究センターなどの研究機関もあるけれども)。

各部会はさらにおのおの数の小部会に分れており、例えば私のもっぱら出席した第三部会は文学史・歴史・宗教と哲学・言語学・建築美術の五小部会があった。他の部会(第五、六、七、八、九部会など)ではどうであったか知らないが、第三部会においては、直接佛教に関係した研究発表は比較的少く、ウィスコンシン大学から最近ニューヨークのコロンビア大学に移った Alex Wayman がタントラ佛教に対する西洋人の誤解を指摘したものと、カナダの Saskatchewan 大学の H. V. Guenther (本人が来られなくて代読であった)がチベット佛教教学について論じたもの、龍谷大学の神子上恵生氏が瑜伽師地論に見える破数論の説について述べたもの、アルジュンチンの Salvator 大学の I. Quiles が涅槃の概念に関して発表したもの(発表がスペイン語でなされたので全く理解できなかった)、くらいであった。なお、ウィスコンシン大学の R. Robinson の研究発表もあったのであるが、これは当初のプログラムには載っておらず、あとからの追加の方に載せられていた。しかもその場所と時間がその後になってまた急に変更されたため、聴きそこなってしまうて、たいへん残念であった。以上の外に、宮本正尊先生

の五河・四大河説に関する発表、京都大学の服部正明氏の陳那・清弁などによって論及される勝論説についての発表なども、主として佛教資料を用いた研究であった。また、ライデン大学の D. S. Ruegg の如来蔵思想に関する研究、ソ連の Bongard-Levin と Tiomkin という二人の学者による中央アジアから新発見の梵語佛典についての研究、などがプログラムに予告されておりながら、不参で、聴き得なかったことも心残りなことであった。

佛教には直接関係ないが、ペンシルヴァニア大学の前田専学氏はジャンカラに帰せられながらその著者性を疑われていた二論典のジャンカラ真作なることを論定した。在外生活の長い氏の研究発表ぶりはさすがに邦人の発表の中では出色のものと思われた。ロンドン大学の T. R. Trautmann が、電子計算機を用いて作者未詳の梵語典籍の作者を推定する試みについて述べたのは、ひどく目先の変わった研究なので印象に残った。

大会の規模があまりにも膨張したせいもあったか、大会の運営では必ずしもうまくは行っていない面がある。ソ連その他の共産圏の参加が(チェコスロヴァキアを除いて)取消されたのは、きびしい国際情勢の反映で致し方のなかったことだが、その外にもかなりの参加取消しがあり、そのようなことが早く伝えられれば、当初に研究発表申込みの機を逸した私たちが大会開催のを知り得たのは本年になってからであった(その申込みの締切り期限は昨年いっぱいであったのに私たちが大会開催のを知り得たのは本年になってからであった)もその場で追加申込みをして、(その用意だけはして行った)

研究発表のチャンスを得ることができたかも知れなかったのである。参加者にあらかじめ配布されるはずの発表要旨も、経済的な理由で〃ということであったが、一般会員の手には渡らなかった。(大会後編輯される Proceedings も同じ理由で一研究について五〇〇語以内の長さに制限されている。)

研究発表はたいてい午前中に終了し、午後や夜は多く個人的な接触や大小いろいろなレセプションや餘興の催しその他に費された。そんな機会や、宿舎での起居や食堂への出入の間に、たびたび思わぬ旧知に出遭わしたのは嬉しいことであった。宿舎の共用のバス・ルームでバスを使っていると、そこへ思いもかけぬカルカッタのS・K・チャルジ―先生がぬっと入って来た時は、双方石鹸の泡だらけの裸体のままで、仕切りの壁越しにしゅべり合った。アメリカへ発つ前に、パリの白土わか女史からお便りを頂いていて、その中に、イタリーのベッツァリという女性が東洋学者会議に行くから、ということであったが、たまたま食堂でその人に遭ったら、それがかつてサンチニケタンで偶然一緒になった事のある人であったのには驚いた。また、

かつてナールランダで一年餘り同室に起居した旧友 T. Venkatacharya (現トロント大学助教授) から招かれて、服部氏と共にその宿舎を訪ね、美しい夫人のもてなしを受けながら、彼の相変らぬ大気炎の長広舌とその口を衝いて流れ出すサンスクリット詩文を久しぶりにたっぷり聞かされたのも楽しいことであった(もつとも少々辟易もさせられたが)。

附随的な催しも色々あった中で、東洋学関係の書籍の展覧会場にだけは二度もでかけた。アメリカ諸大学の出版部(その出品によって各大学の東洋学研究の大体の傾向がうかがえる)や書店の外に、ドイツのオットー・ハラソーヴィッツ、フランスのアドリヤン・メーゾンヌーヴ、オランダのE・J・ブリルやモートン、インドのモティラルなど名の聞えた書店や、大英博物館などの施設からも、多数が出陳されていた。即売はされなかったが、ずいぶんたくさんカタログを集めて来たので、多分かなり研究室のお役に立つことと思う。